

建長寺の鐘銘

西尾賢隆

はじめに

先に「蘭溪道隆の四六文」(『文藝論叢』六八号、若槻俊秀教授退休記念論集、二〇〇七年)と題して、『大覚録』のうち、常樂寺・建長寺での語録から四六文を摘出した。この論考では、建寧寺語録、鐘銘・小参についての四六文を見ることにする(『大覚録』の番号は、高木宗監『開山大覚禪師語録集訓読篇』(建長寺、一九九四年)による)。

一 建寧寺語録

建仁寺は、はがき通信(『日本歴史』六八七号、二〇〇五年)で述べたように、後深草帝の諱を避けて仁を寧とする。仁は呉音なので呉音の普通の字で避諱したらよさそうなものの、蘭溪道隆の頭には、寧(唐音)の字が浮かんだのであろう。入院法語の一つに檀越(北条時頼)のために唱えた香語がある。

9 此一瓣香、奉爲東州信心檀越最明寺禪門。

伏願

爲國輸忠、贊明君之盛德、
了心達道、豎末世之寶幢、

永爲皇祚之股肱、

長作法門之梁棟、

(大正八〇、63c) 弘長二年

此の一弁香、東州信心の檀越最明寺禪門の爲にし奉る。伏して願わくは、国の爲に忠を輸し、明君の盛德を贊け、心を了り道に達し、末世の宝幢を豎て、永く皇祚の股肱と爲り、長に法門の梁棟と作らんことを。

12 乃云、

巨福山中越十霜、

了無玄妙可商量、

業風一鼓難回避、

不覺全身在帝郷。陽

機輪無滯、動著則左轉右旋、

鐵帚隨身、到處則東搖西掃、

法從吾建、

物逐人興。

所以

在東土則把定放行、罕逢識者、

（來西州則放行把定、多是知音。

九重天上聖人、道高德備、
十萬戶前瑞氣、風暖花香。

到這裡

（法法不隱藏、
頭頭俱顯露。

諸人要見顯露底法麼、以手指云、

（滿目青山疊亂青、何處不是、
長堤淥水浮輕淥、那箇知歸。

以拂子擊繩床、於此

（洞徹心源、
了無異相。

便見

（慈風共堯風廣扇、四海昇平、
佛日與舜日齊明、萬民樂業。

（文臣武將、咸歸有道之君、
樵父漁夫、共樂無爲之化。

如是則

（盡大地是箇解脫門、全身在裏許、

（總十方爲一建寧寺、捨我其誰歟。

彈指聞梵刹圓成、

一瞬中魔軍頓息。

恁麼舉唱、大似

依朱著墨、

順水行舟。

末當得宗乘向上事、且如何是宗乘向上事、良久、

夜月流輝含古渡、

春風著意發新條。

（64 a b）弘長二年

乃ち云く、巨福山中十霜を越え、了に玄妙の商量すべき無し。業風一たび鼓して回避し難く、覚えず全身帝郷に在るを。機輪滞り無し、動著すれば則ち左転右旋し、鉄帶身に随う、到る処則ち東搖西掃す。法は吾に従つて建ち、物は人を逐うて興る。所以に東土に在るときは、則ち把定放行し、識者に逢うこと罕なり、西州に来るときは、則ち放行把定し、多是そ知音。九重天上の聖人、道高く徳備り、十万户前の瑞氣、風暖かに花香し。這裡に到つて法法隱藏せず、頭頭俱に顕露す。諸人顕露底の法を見んと要するや。手を以て指ざして云く、満月青山乱青を疊む、何の処か不是、長堤渌水輕渌を浮べ、那箇か帰るを知る。弘子を以て繩牀を撃ち、此に於て心源に洞徹せば、了に異相無し。便ち見ん、慈風堯風と広く扇いで、四海昇平、仏日舜日と齊しく明にして、万民業を樂しむ。文臣武將、威^みな有道の君に歸し、樵父漁夫、共^みな無為の化を樂しむ。是の如くなるときは則ち、大地を尽して是れ箇の解脱門、全身裏許に在り、十方を総べて一建寧寺と爲すも、我を捨てて其れ誰ぞや。彈指の間、梵刹円に成り、一瞬の中、魔軍頓に息む。恁麼の挙唱、大いに朱に依り墨を著け、水に順つて舟を行

るに似たり。未だ宗乘向上の事に当得せず、且つ如何なるか是れ宗乘向上の事。良久、夜月輝を流して古渡を
含み、春風意を著けて新条を発す。

この索話の一段は、七言絶句と四六文とから構成される。索話は、垂語・釣語・垂示ともいわれる。大衆に疑問が
ないか、どうか、と問いかけている。

23 無明和尚忌拈香。

囊踞陽山一關、

孰敢臨風直視。

倒握墨漆竹篋、

爲人敲骨出髓。

發無明火、鍛聖鎔凡、

施縱奪機、回生起死。

別德二十春、

突然在這裏。

著眼好生觀、

不知是不是。

我昔遭他折挫來、

直至而今恨弗已。

見其影則攢眉、

聞其名則切齒。

（既然如是、因甚今朝、
引領同衣、焼香作禮。噫。

親不親郷中人、

美不美郷中水。

水有源今木有根、

出乎爾兮返乎爾。

便焼香。

（65 a）弘長二年

無明和尚忌拈香。曩に陽山の一関に踞す、孰か敢えて風に臨んで直視せん、倒に黒漆の竹篋を握って、人の為に骨を敲いて髓を出す。無明の火を発して、聖を鍛え凡を鎔し、縦奪の機を施して、生を回し死を起す。徳に別れること二十春、突然として這裏に在り。眼を着けて好生に観よ、知らず是か不是か。我れ昔し他の折挫に遭い來たる、直に而今に至るまで恨み已まず。其の影を見るときは則ち眉を攢め、其の名を聞くときは則ち齒を切る。既然に是の如し、甚に因りてか今朝、同衣を引領して、焼香作礼す。噫。親不親郷中の人、美不美郷中の水。水に源有り木に根有り、爾より出でて爾に返すと。便ち焼香す。

この拈香の四六文は、上声紙の仄韻を踏む。ただ礼だけは、齊の上声であつて、蘭溪は紙韻のつもりで作ったのであろう。

25 謝兩班上堂。

（一鐵破三關、已勞心力、

一言說六國、總涉思惟。

不勞心力底、

起臨濟之墜緒、
整大法之綱維。

當機觀面、
觀面當機。

玲瓏妙轉、
左之右之。

希奇希奇、

三脚驢兒解弄蹄、
令人長憶老楊岐。

(65a) 弘長二年

両班に謝するの上堂。一鏃三関を破り、已に心力を勞す、一言六国に説く、総べて思惟に渉る。心力を勞せざる底に、臨濟の墜緒を起こし、大法の綱維を整う。當機觀面、觀面當機。玲瓏妙に転じ、左之右之。希奇希奇。三脚の驢兒解く蹄を弄し、人をして長く老楊岐を憶わしむ。

この上堂は、四六文であつて、押韻し、上平声支と微の通押。

50 上堂。

點那箇心、德山有口如啞、
喫三頓棒、臨濟抱恨難伸。

若非盡底掀翻、
爭得遼天索價。

我觀諸人、總是沒量大漢、何不超他一頭地。良久、

利劍只言分勝負、
陣雲纔起便迷蹤。

(66 c) 弘長三年

上堂。那箇の心をか点ず、徳山に口有り啞の如く、三頓の棒を喫し、臨済恨を抱いて伸べ難し。若し底を尽して掀翻するに非ざれば、争か遼天価を索むるを得ん。我れ諸人を観るに、総な是れ没量の大漢、何ぞ他に一頭地を超えざる。良久して、利劍只だ言う勝負を分つと、陣雲纔かに起れば便ち蹤に迷う。

62 正旦上堂。

新歲多奇事、
虛空展笑眉。
更談新佛法、
也要大家知。

召大衆、還見麼。

五條橋度人無數、
九重塔定相弗移。

街北街南、歡聲不絶、
寺前寺後、車馬奔馳。

處處顯揚此事、
頭頭漏泄眞機。

且道如何是此事。良久、
蘭溪無暇向伊設、

(問取張家三箇兒。

(67 b) 弘長四年

正旦上堂。新歲奇事多し、虚空笑眉を展ぶ。更に談ず新仏法を。也た大家の知らんことを要す。大衆を召して、還た見るや。五条の橋人を度すこと数うる無く、九重の塔定相移らず。街の北街の南、歡声絶えず、寺の前後、車馬奔馳す。処々此の事を顕揚し、頭々真機を漏泄す。且らく道え如何なるか是れ此の事。良久して、蘭溪伊に説くに暇無し、張家三箇兒に問取せよ。

この正旦上堂は、五言絶句と四六文からなり、五絶と四六を通して上平声支韻を踏む。単対の機のみ上平声微韻であるが、支の通押である。五絶の結句の要は、意味からすると平声になるものの、蘭溪は仄声のつもりで作詩している。

二 建長禪寺鐘銘

鎌倉第一等の鐘として知られる建長寺の梵鐘は、住持蘭溪によってその鐘銘が作製されて、色々なものに史料として載録されている。鐘銘から採られた釈文で句読点のあるのは、『神奈川県史』資料編1、四四七号、『建長寺史』編年史料編、第一巻、建長七年二月廿一日の条の二点のみであり、どちらも句読に正しくないところを含む。どうして『大覚録』を参照しなかったのか不思議なことである。そこで、どうしてそこに句読が入るのか、四六文として分か書きをして示す。

巨福山建長禪寺鐘銘

南閩浮提、各以音聲長爲佛事、
東州勝地、聊芟榛莽翦此道場。

イ、聊芟は、特開

天人影向、
龍象和光。

口、影は、歸

雲斂霏開兮、樓觀百尺、
嵐敷翠掃兮、勢壓諸方。

ハ、掃は、鎖

事既前定、

法亦恢張。

ニ、范は、範

圍范洪鐘、結千人之緣會、
宏撞高架、鎮四海之安康。

脫自一摸、重而難舉、

圓成大器、鳴則非常。

蒲牢纔吼、星斗晦藏、

群峰蒼響、心境俱亡。

扣之大者、其聲遠徹、

扣之小者、其應難量。

東迎素月、

西送夕陽。

ホ、寐は、寐へ、寤は、寤

昏寐未惺、攬之則寤、
寔安猶恣、警之而莊。

破塵勞之大夢、

（息物類之顛狂。

妙覺覺空、根塵消殞、
返聞聞盡、本性全彰。

共證圓通三昧、

永臻檀施千祥。

回此善利、

上祝親王。

民豐歲稔、

地久天長。

建長七年乙卯二月二十一日

本寺大檀那相模守平朝臣

時頼謹勸千人、同成大器、

建長禪寺住持宋沙門道隆謹題。

都勸進監寺僧 琳長

大工大和權守物部 重光

『大覚録』卷下所収のものと異同のあるところは、四六文の下に示した。◎の圈点は、下平声陽韻を示す。以下に読み下し文を提示する。

巨福山建長禪寺の鐘銘

南閭浮提、各々 音声を以て長く仏事を為し、東州の勝地、聊か榛莽を芟り此の道場を翺む。天人影向し、龍象和

光す。雲斂まり霏開いて、樓觀百尺、嵐敷き翠掃きて、勢い諸方を圧す。事既に前に定まり、法も亦た恢張す。洪鐘を囲范するに、千人の縁会を結び、宏おほいに高架に撞き、四海の安康を鎮す。一模より脱して、重くして挙げ難し、大器を円成して、鳴ること則ち常に非ず。蒲牢纔かに吼なり、星斗晦藏し、群峰響に答え、心境俱に亡す。之を扣くこと大なれば、其の声遠く徹とき、之を扣くこと小なれば、其の応量り難し。東のかた素月を迎え、西のかた夕日を送る。昏寐未だ惺さらず、之を攪とるときは則ち寤さめ、宴安猶お恣にして、之を警むるときは而すなち莊なり。塵勞の大夢を破り、物類の顛狂を息む。妙覺覺空して、根塵消殞し、返聞聞尽して、本性全く彰あわる。共に円通三昧を証まり、永に檀施の千祥を臻いたらしむ。此の善利を回らして、親王を上祝す。民豊かに歳稔つて、地久しく天長し。

建長七年乙卯二月二十一日、本寺大檀那相模守平朝臣時頼、謹んで千人に勧めて、同に大器を成す。建長禪寺住持宋沙門道隆謹んで題す。都勧進監寺僧琳長。大工大和権守物部重光。

次に現代語訳を試みる。

須彌山の南にある人間界は、それぞれ鐘の音を久しく仏への供養としていて、そのうちの東国の優れた地である鎌倉では、まず藪を刈りこの道場建長寺を開創した。天上界、人間界にわたって仏があらわれ、すぐれた修行者が身をあらわす。雲が収まり霧が晴れて百尺の高殿があらわれ、もやが広がり緑がさつと塗つたような中に、その姿は辺りを凌いでいる。梵鐘を作ることは前もって決つていて、その上仏法も広がりを見せている。大きい鐘を鑄造するのに、千人の信者の講を結成し、高く釣つたかねを盛んに鳴らし、世界の安泰を鎮護する。一つの鑄型から脱けると、重くて挙げるのが難しいものとなり、大いなる鐘に完成して、鳴らすと並のものとは思えない。鐘が鳴つたとたん、星がかくれてしまい、峰々が鐘に共鳴し、まるで心持ちがみな無になつた。大きく扣くと、その鐘の音は遠くにまで行き渡り、小さく扣くと、その響きは計りがたいものがある。東に夜明けの月を迎え、西に夕日を送ることになる。深く眠つて悟らなくても、鐘が鳴ると目覚め、寛いで気ままでも、それを警めて厳かなものがある。

煩惱の長い夢を断ち切り、万物の氣違い沙汰を絶ち切る。仏のように悟り尽して、一切の対立が無くなり、鐘が鳴り聞くのをはね返して聞き尽すと、本来の真实性がすべて顕われてくる。みな欠けることのない悟りの世界を覚ることになり、いつまでも檀越の幸いをもたらすことになる。この菩提の利益を回向し、上は宗尊親王を言祝ぎ、民が豊かで年々稔り、天地が長久でありますようにと願う。

北条時頼は、千人の同志と共にこの大鐘を鑄造しようと発願し、物部重光が製作し、鐘樓に掛けられたのは、建長七年（一二五五）二月廿一日のことであつた。この時の記念の香語「挂鐘」（『大覚録』卷下、大正八〇、91a）は、以下のようである。

跳出洪鑪大器圓、

千人同結此良縁。

當陽一擊無回互、

切忌餘音到客船。

打一下云、諸仁者只今

是聲來耳畔、

是耳往聲邊。

若把耳聞、被聲所轉、

各宜領在、未扣已前。

未扣已前悟去。

透徹三千大千。

建長。暫借洪鐘口、

重爲檀那次第宣。

又打一下云、

歷妙音周法界、

太平無象百千年。

洪鐘を跳出して大器円なり、千人同に結ぶ此の良縁。当陽一撃 回互無し、切に忌む餘音の客船に到ることを。打すること一下して云く、諸仁者只だ今 是れ声 耳畔に来るか、是れ耳 声辺に往くか（『楞嚴經』卷三に基づく）。若し耳を把て聞かば、声の所転を被らん、各々宜しく未扣已前に領在すべし。未扣已前に悟り去らば、三千大千に透徹せん。建長暫く洪鐘の口を借りて、重ねて檀那の為に次第に宣べん。又た打すること一下して云く、歷々たる妙音 法界に周く、太平 象無し百千年。

七絶二つの間に、四六文が入り、しかも、全体を下平声先韻で押韻している。

大きな溶鉢炉を躍り出た大きな鐘はまどかであり、千人が共にこの鐘を造るのに良縁を結んだ。真つ向から一打ち鳴らすと互いにかみ合うこともなく、是非とも余韻が蘇州郊外の客船にまで聞こえるのを避けねばならない。一打ちしていう、あなた方には現在、鐘の音が耳のそばから聞こえるのか、それとも、耳が鐘のあたりに往っているのか。もし耳で聞いたのであれば、鐘の音の説法を聞いたことになり、各々鐘を撞かないうちに聞いたことになる。鐘を撞かないうちに聞いたならば、全宇宙に突き抜けている。わたしは一先ず大鐘の音を借りて、檀越のために順次説法する。さらに一打ちしていう、はっきりと優れた音が全世界に充ち、天下泰平が形の無い鐘の音のように百千年の永きにと続きますようにと願う。

戦の無い平安を建長寺の鐘の音を通して蘭溪は説く。

三 最明寺開堂小参

北条時頼の持仏堂としての役を果たした最明寺は、建長寺に隣接した山内の別業に置かれたという。⁽³⁾その開堂は、『大覚録』巻中(75c)建長寺小参の配列からすると、弘長元年(一二六二)夏安居の後ということになる。⁽⁴⁾蘭溪による開堂小参は、次のようなものである。

治心明心、垃圾上重添垃圾、

究理達理、相應中轉不相應。

眼不見而爲淨、

心不疑而自安。

所以

釋迦出世、達磨西來、

攻乎異端、斯害也已。

雖然

靈山二千年、公案現在、

少林八百載、風月猶新。

會得則打破畫瓶歸去來、太平好唱還鄉曲、

不會則行到路窮橋斷處、坐看雲散月明時。

會與不會則且置、只如大力量人分上世間出世平等超越一句、作麼生道。拍膝一下。

劍爲不平離寶匣、
藥因救病出金餅。

復舉、昔有僧問古德、深山窮谷中、還有佛法也無。德云、有。僧云、如何是深山窮谷中佛法。德云、石頭大底大、小底小。師云、古德真不掩偽、曲不藏直、太煞分明、翻成逗曲。山僧則不然、或有人問深山窮谷中還有佛法也無、亦向佗道、有。待伊又問如何是深山窮谷中佛法、以一頌齎之。

潺潺。澗水流無盡、

颺颺。松風韻愈奇。

山主好提三尺劍、

勦除禍事定坤維。

坤維定後又且如何。

達磨本來觀自在、

淨名元是老維摩。

この小參は、四六文と、古則の提起と、偈頌の七絶とからなる。最初の隔対四句目は、仄声だが、蘭溪は平声のつもりで作っている。

心を治め心を明らむ、垃圾^{ちりく}上に重ねて垃圾を添う、理を究め理に達す、相應中転た相應せず。眼は見ずして淨爲り、心は疑わずして自ずから安んず。所以に釈迦出世し、達磨西来し、異端を攻^{おさ}むるは、斯れ害あるのみ。靈山二千年なりと雖然^{いんどう}も、公案現に在り、少林八百載なるも、風月猶お新し。会得するときは則ち画瓶を打破して^{かろうなんいぎ}掃去来、太平の唱うるに好し還郷の曲、会せざるときは則ち行きては到る路窮まり橋断^{たうき}る處、坐^{まど}ろに看る雲散じ月明なる時。会と不会とは則ち且らく置き、只だ大力量の人の分上世間出世平等に超越する一句の如きは、作麼生か道わん。

膝を拍すること一下。剣は不平の為に宝匣を離れ、薬は病を救うに因て金瓶を出づ。

復た拳す、昔し有る僧 古徳に問う、深山窮谷の中、還た仏法有りや。徳云く、有り。僧云く、如何なるか。是れ深山窮谷中の仏法。徳云く、石頭大なる底は大、小なる底は小。師云く、古徳 真 偽を掩わず、曲直を藏さず。太煞だ分明にして、翻つて迂曲と成る。山僧は則ち然らず、或有人深山窮谷の中還た仏法有りやと問わば、亦た佗に道わん、有り。伊れ又た如何なるか。是れ深山窮谷中の仏法と問うを待て、一頌を以て之に酬えん。潺潺たる礪水流れて尽きること無く、颼颼たる松風 韻愈々奇なり。山主好く三尺の剣を提げて、禍事を勦除して坤維を定む。坤維定つて後又た且つ如何。達磨本来 観自在、浄名元よりは是れ老維摩。

○治心は、『荀子』解蔽篇に、「仁者の思うや恭、聖人の思うや楽。此れ心を治むるの道なり」とある。○明心は、『雲門録』巻中に、「挙す、古云く、声を聞きて道を悟り、色を見て心を明らかにす。師云く、作麼生か。是れ聞声悟道、見色明心。乃ち云く、観世音菩薩錢を將ち來つて餠餅を買つて、手を放下して云く、元來祇是だ饅頭のみ」とある。○究理は、『趙州録』に、「若是し新たに衆に入る底の人、也た須らく理を究めて始めて得し」とある。○達理は、『莊子』秋水篇に、「北海若曰く、道を知る者は、必ず理に達す」とある。○相応は、『臨濟録』示衆に、「理行相応し、三業を護惜して、始めて成仏するを得と言道う」とある。○攻乎異端、斯害也已は、『論語』爲政篇による。○行到處、坐看……時は、『王維詩集』終南別業に、「行きて水の窮まる処に到る、坐ろに看る雲の起る時」(岩波文庫)とある。○世間出世は、『景德録』巻七、大梅法常章に、「此の心は元是れ一切世間出世間法の根本なり」とある。○劍為不平離宝匣、薬因救病出金餅は、『楊岐方会語録』に基づく。○有僧問古徳……小底小は、『景德録』卷廿四、帰宗道詮章に、「問う、九峰山中に還た仏法有りや。師曰、有り。曰く、如何なるか。是れ九峰山中の仏法。師曰く、山中の石頭、大なる底は大、小なる底は小」とあるのに依つてゐる。○古徳真不掩偽、曲不藏直は、『天聖広灯録』卷廿、鉄幢□覺章に、「師上堂して云く、……」とあるのによる。○達磨本来観自在は、『碧巖録』一則、本則評唱に、

「志公機を見て作して、便ち云く、此れは是れ観音大士、仏心印を伝う」とあり、達磨は観音の化身だとする。○浄名元是老維摩は、『碧巖録』八四則、頌評唱に、「梵語に維摩詰と云い、此に無垢称と云い、亦た浄名と云う。乃ち過去の金衆こんぞう如来なり」という。

蘭溪は、最明寺での開堂の説法に際し、右に見たように典拠を挙げながら法を説いている。それを踏まえながら現代語訳してみたい。

塵土の積もった上に更に積もったような多くの煩惱がある。そのけがれた心をうまく調えて心を明らかにする。教理と実践とが即応しているのが次第に即応しなくなっている。それを真実に自己を究明し真如の理に通達している。眼は見なくてもきれいであり、心は疑うことなく自ずから安らかである。故に釈迦は出世し、達磨は西来した。仏の道と違ったことを究明するのは、ただ害があるだけだ。釈尊が靈山会上で迦葉に大法を付嘱してから二千年たっても、公案は現に在り、達磨が少林寺で二祖に法を伝えてから八百年経過しても、風月はなお新たなものがある。仏の道を会得するときは、画いた瓶をおちこわし帰らないで、天下太平の世に故郷に帰る歌を唱えるのにふさわしい。会得しないときは、歩きまわっていつか路もなく橋もなくたつところまで来ており、我れ知らず雲が散つて月が明るく出るのに見入るひととき。会と不会とはさておいて、大いなる働きのある人の本来の持ち前が世間出世間の法を平等に超越する一句としてどのように言つたらよいか。膝を拍つこと一回、剣は不平を正すために宝の箱から出され、薬は病を救うために金の瓶から取り出される。

更に次の古則を提起する。昔ある僧が古徳に質問した。深山窮谷の中に仏法が有りますか。古徳が有りと答える。すると僧は、どのような仏法でしょうかと云う。古徳は石の大きなものは大きく、小さなものは小さいと答えた。蘭溪がいう、古徳が、真実は偽りを覆い隠さなく、曲つたものは真直ぐなものを人目につかぬようにしない、というのは、非常に明白だが、かえって、回りくどい。私はそうは言わない。ある僧が深山窮谷の中に仏法がありますかとい

つたら、彼に言う、有りと。彼が追つ掛けて如何なるか是れ深山窮谷の中の仏法と訊ねるのを待ち受けて、一つの偈頌を答へとする。浅い溪流の谷川の水が尽ること無く流れ、さつと吹く松風の響きが益々優れている。山主はよく三尺の剣を持ち、一大事を討ちほろぼし大地を治める。大地が治まったその上は、どうだ。達磨は元來観音の化身、浄名はもちろん維摩居士だ。

山内にある時頼の別業内の持仏堂を最明寺と称し、深山幽谷中の寺に準えて蘭溪は仏法を説いている。のち北条時宗によって、最明寺が再興されて、禪興寺と称した。その禪興寺は、塔頭の明月院しか残らない。

おわりに

蘭溪の建寧寺語録の一部、建長寺鐘銘、それに最明寺開堂小參をここでは取り上げた。これまでに鐘銘を論題にしたことはない。墨蹟そのものは残っていないものの、鐘そのものに蘭溪の筆蹟を今に伝えていて墨蹟文書の一つと考へてよいであろう。時頼一人の喜捨ということでなく、多くの信仰を共にする同志とこの大鐘を鑄造したことは、時頼の得宗体制が安定したものとなるのに幸いしたことであろう。

小參の現代語訳に当っては、典拠を省略して、たとえ字面だけでも訳してみようと思ったが、それは適わず典拠を探らざるを得なかった。それでも多くの誤りを冒していることであろう。四六文で上堂、小參、鐘銘を作製することは、中国人の蘭溪であつても、それなりに準備が大変だったことと思われる。それが「參禪学道は、四六文章に非ず」という遺誠となつて、弟子達への戒めとなつた。

注

(1) 梵鐘そのものは、東京国立博物館での「鎌倉——禅の源流」展において展示されていて、時頼や道隆について字が小さくなっているのを確めた。しかし、全体は照明により読み辛い点があった。釈文を作るに際し、図録(二〇〇三年)それに高木宗監『建長寺史——開山大覚禅師伝』(建長寺、一九八九年)の口絵の映りがよく参考した。釈文そのものは、『鎌倉市史』考古編(赤星直忠執筆、吉川弘文館、一九五九年)の建長寺鐘が、よくその鐘銘を採録している。しかし、第一区の八行目、四が西となっているのが惜しまれる。

(2) 餘音到客船は、張継の楓橋夜泊を踏まえる。浅見洋二「形似の変容——言葉と物の関係から見たいわゆる宋詩の日常性に関する一考察——」(『中国——社会と文化』二二〇号、二〇〇五年)に「夜半鐘声至客船」の「寺の鐘

を夜半に衝くことはないから張継の詩の描写はおかしい」と「蘇州では夜に鐘を衝く」という議論を宋詩の日常性からとりあげる。また、堀川貴司「日本中世禅林における三体詩の受容——二つの注をめぐって——」(『駒沢大学禅研究所年報』一七号、二〇〇六年、のち『詩のかたち・詩のこころ——中世日本漢文学研究』)若草書房、二〇〇六年に再録)にもこの七絶を取り上げる。

(3) 秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」(『史学雑誌』一〇六編九号、一九九七年)、「都市鎌倉の形成と北条氏」(五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』所収、高志書院、二〇〇四年)参看。

(4) 『国史大辞典』第六卷「最明寺」(葉貫磨哉執筆)の項では、「最明寺が禅院(臨済宗)の形態を整える時期は分明ではないが、……」とする。